

菅平生き物通信

ホームページ <http://www.sugadaira.tsukuba.ac.jp> 電子メール ikimono@sugadaira.tsukuba.ac.jp 電話 0268-74-2002 Fax 0268-74-2016

新年のごあいさつ

菅平生き物通信の読者の皆様、新年あけましておめでとうございます。熱心な読者である皆様のおかげで、菅平生き物通信も31号を数えることができました。心から御礼申し上げます。

菅平高原実験センターは、今年で80回目の新年を迎えました。80年前は敷地内のほとんどが草原だったことなど信じられないほど、木々は大きくなりました。道路に面したカラマツは太木になり、立派な景観を作っております。

正門から研究棟までのアプローチは、右側にシラカバやアカマツの林、左側に樹木園が広がり、落ち着いた雰

囲気を醸しています。樹木園では枯れ木や枯れ枝の整理を行い、園内の観察路もきれいに整備しました。増えすぎたハリエンジュを伐採し、低木にも光が注ぐようにした結果、オニヒヨウタンボクやハナヒヨウタンボクも息を吹き返し、かわいらしい花を咲か

せてくれることでしょうか。樹木園の奥に広がる草原は雪に覆われていますが、動物たちの活発な活動は雪の上の足跡から知ることができます。ウサギ、キツネ、テン、イタチ…。そして、町田先生が指導する雪上の動物の足跡を追跡する実習では、動物たちより元気な学生たちの歓声が絶えません。

草原の奥のアカマツ林や広葉樹林、その奥の大明神沢の森林には研究教育用の観察道の整備が完了し、ミズナラなどの大木たちとの出会いを楽しむことができます。今年も大明神の滝は氷結し、神秘的な姿を見せてくれるでしょう。春、雪解けとともに草原も森林も新緑が萌え、その生命に満ちた景観は私たちに大きな力を与えてくれます。

当センターのこの素晴らしい自然を皆様に公開するようになって、5年がたちました。社会貢献プロジェクトの一環であるナチュラリスト養成講座を巣立った方々は、センターの自然を守る活動をする



氷結した大明神の滝

せるようになりました。春にはカタクリの群落が可憐な花を咲かせ、皆様の目を楽しませてくれることでしょうか。

樹木園の奥に広がる草原は雪に覆われていますが、動物たちの活発な活動は雪の上の足跡から知ることができます。ウサギ、キツネ、テン、イタチ…。そして、町田先生が指導する雪上の動物の足跡を追跡する実習では、動物たちより元気な学生たちの歓声が絶えません。

草の奥のアカマツ林や広葉樹林、その奥の大明神沢の森林には研究教育用の観察道の整備が完了し、ミズナラなどの大木たちとの出会いを楽しむことができます。今年も大明神の滝は氷結し、神秘的な姿を見せてくれるでしょう。春、雪解けとともに草原も森林も新緑が萌え、その生命に満ちた景観は私たちに大きな力を与えてくれます。

当センターのこの素晴らしい自然を皆様に公開するようになって、5年がたちました。社会貢献プロジェクトの一環であるナチュラリスト養成講座を巣立った方々は、センターの自然を守る活動をする



ナチュラリスト養成講座修了生による観察会

る傍ら、センターの公開日には案内役として活躍していただきます。そして、東郷堂さんの御協力で「菅平生き物通信」を皆様のお宅に配布するようになって3年が過ぎようとしております。地元の皆様にも、菅平高原実験センターは身近なものになったのではないかと思います。

現在、当センターでは、センター長を含めて6人の教員と1人の研究員が研究と教育に従事し、事務担当の専門員1名、草原や森林の管理、施設や設備の管理、菅平生き物通信の編集に従事する技術職員3名、宿舍担当、事務担当、研究補助の非常勤職員7名の計18名が日々の業務に励んでいます。今年もスタッフ一同、皆様のご家庭に菅平の自然の素晴らしさをお贈りしたいと思います。今年も菅平高原実験センターと「菅平生き物通信」をよろしくお願い致します。(センター長 沼田治)

お知らせ

2月1日(土)に、大明神の滝をご覧いただける観察会を行います。詳しくは生き物通信30号、又は当センターHPをご覧ください。申込受付期間(1月14~17日 9時~17時) 担当:佐藤

冬の動物達

キツネ(イヌ科)

体長およそ60cm。肉食性の動物で、鋭い嗅覚で獲物のネズミやノウサギなどの居場所を探し出して捕える、ハンターです。冬になると、林内の少し開けたスペースに巣穴を作り、春まで繁殖のためにその巣穴を利用します。4月頃、雌は巣穴で子供を出産し、夏まで子に付き添い世話します。その後、子供は生まれ、巣穴を出て、それぞれ分散し、単独生活を送ります。センターの敷地内でも、巣穴や、その周辺に縦横に走る足跡がたくさん見られます。

カモシカ(ウシ科)

生き物通信ではお馴染みになりつつあるカモシカは、名前に「シカ」とつきませんが、実はウシの仲間です。体長およそ1m。積雪には比較的強く、雪道も訳ないといった足取りでざつと歩きます。普段は単独か母子、まれに雌雄と子による家族で行動することもあります。木の芽、葉、小枝などを常食とします。カモシカの一日は、食事、移動、休息を繰り返しているようですが、時に興味を抱いたものに対し、その歩みを止め、じっと注目することがあります。外で作業をしている時、後ろの岩影からカモシカがその様子を見ている…なんてことがあるかもしれません。



(藤田麻里)

冬の野外へ出かけると、彼らがたくましく生きる様子が垣間みられるかもしれません。

冬を乗り越える虫たち

冬の初め頃、菅平高原実験センター内には大量のカメムシが目見えます。スコットカメムシという名のこのカメムシ、皆様にも覚えはないでしょうか? 何故冬が近付くと彼らは大



建物内で越冬するスコットカメムシ

木や土の中など寒さを凌げる場所を選んで越冬し、やがて冬が終わると、新しく巣を作り自身のコロニーを繁栄させます。その他にも樹皮の下や土中に潜り冬を寒さを凌ぐ昆虫は多く、夏場にはそこら中を飛び回っていた虫が鳴りを潜める頃、木の樹皮を剥いてみると意外な昆虫に出会えることもあるかもしれません。

ります。越冬のための賢い手段ではありませんが、これほど大量に目に留まるのは彼らカメムシくらいのもので、それでは他の昆虫ほどのようにして、寒い冬を乗り越えているのでしょうか。

例えばアシナガバチやスズメバチなどのハチは、越冬するのは翌年新た女王となる個体のみで、その他はすべて冬が訪れる前に死んでしまいます。生き残った新女王は、一匹だけで朽

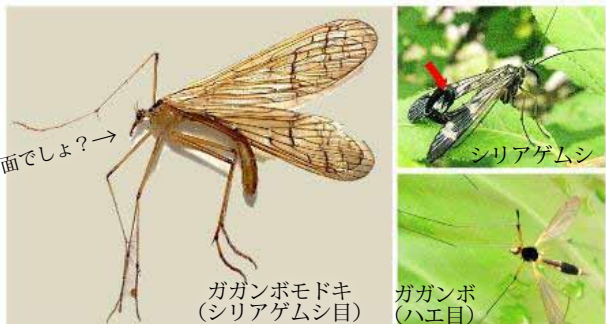
(松嶋美智代)

その他、成虫ではなく卵や幼虫、蛹として冬を越すものや、壁の隙間などに密集して集団で冬を越すものなど、虫たちは様々な方法で長い冬を乗り越えています。多くの虫が人目に付かないところに身を潜めているこの季節、虫が苦手だという人には喜ばしい季節かもしれないませんが、そこかしこにひっそりと隠れた虫たちを探してみると、何か新しい発見があるかもしれません。

他虫の空似

生き物の中には、「○○ダマシ」●

●「モドキ」という名をつけられているものが数多くいます。例えば、アゲハチョウによく似た蛾であるアゲハモドキや、カマキリに似たカマキリモドキ（ウスバカゲロウの仲間）。ニジウヤホシテントウのように、益虫である肉食性テントウムシに似ていながらナス科植物を食害するため、テントウムシダマシと呼ばれるものもいます。こうしたモドキやダマシといった名前は、先に命名されている生き物に「似て非なるもの」という意味でつけられます。今回ご紹介するのは、ガガンボに似て非なるものの「ガガンボモドキ」です。



ガガンボとは、ハエ目ガガンボ科の仲間の総称です（図右下）。蚊をそのまま大きくしたような形をしており、ハエの仲間なので後翅が退化して平均棍（へいきんこん）と呼ばれる構造に変化しています。そしてガガンボモ

ドキ（図左）というのは、名前の通りガガンボには似ているもののハエ目です。すくなく、シリアゲムシ目（図右上）という昆虫の仲間です。ガガンボによく似た細くて長い肢をもつもの、一般的な昆虫のように翅は2対あり、シリアゲムシ目の特徴の一つである細長い馬面な顔をしています。一方、シリアゲムシ目の仲間でありながら、目の名前の由来である「尻上げ（図右上・赤矢印）」はみられません。

ガガンボモドキの大きな特徴は、その細くて長い肢です。普段はこの長い肢を器用に使い、前肢や中肢でぶら下がったり、その状態から後肢で餌となる小昆虫などを捕まえたりします。交配行動も変わっていて、オスは後肢で捕まえた獲物をメスにプレゼントし、メスが餌を食べる間に交尾を行います。

生き物の名前にはその特徴が詰まっているものが多いです。どうしてこんな名前が？という疑問を感じたら是非調べてみてください。予想もしなかった驚きがそこにあるかもしれません。（真下雄太）

『コムシのセカイ』 <http://kaoru-s.wix.com/dipluran-world>

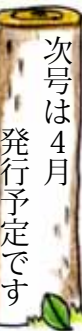


みなさん、「コムシ」という虫をご存知ですか？ 生き物通信第9号で紹介したので、覚えていた方もいらっしやるかもしれません。コムシは昆虫の祖先が翅（はね）を獲得する以前に枝分かれた、いわゆる無翅昆虫類の一群です。

コムシは林床の落ち葉の下やガレ場、畑、庭、公園などみなさんの身近の至る所にいます。しかし、土の中に生息しているため、目にする機会はそれほど多くはありません。身近にいないのに知らないなんてもったいない！ と思いませんか？ そこで、「コムシ目ってどんな虫？」を小中学

『コムシ目 紹介ホームページができました!』

本通信の印刷・配布は、東郷堂さんにご協力いただいています。次号は4月発行予定です



晩秋のある日、運転中に「カタカタカタ」という音が車内に響いていることに気が付きました。どうやら音の発信源は、助手席側の車体の表面です。車を隅々までチェックしても、原因がよくわからない……しかし、一枚のポプラの落ち葉が車体の隙間に挟まっていました（図1）。実は、これが異音の犯人だったのです！



また、日本に自生するヤマナラシ属のヤマナラシは、葉が垂れ、風に揺れて音を出すゆえに「山鳴らし」とされています。ヤマナラシ属の樹木の葉がざわざわ音を立てるという認識は、万国共通なのです。このように名の由来を知ると、い



えの人の観察力や感性に、本当に感心します。

葉は三角形、長い葉柄があるのが大きな特徴で（図2）、風が吹くと葉がゆれ音を立てます。ポプラの学名（学術的な名前のこと・ラテン語）は、ポプルス・ニグラ（*Populus nigra*）です。ポプルスとはヤマナラシ属のことをさしますが、「人々」や「群衆」という意味もあります（羅和辞典、主参考文献樹木大図説1（有明書房）

風にそよぐポプラの葉

ポプラの木